

—最近における小動物臨床情報 (IV)—

エキゾチック動物の獣医療と今後の展望

三輪恭嗣[†] (東京大学附属動物医療センター非常勤講師・
みわエキゾチック動物病院院長)



1 はじめに

近年、エキゾチック動物という言葉が獣医療や一般書籍でも目にする機会が増加してきた。しかし、一般の人たちはもちろん獣医師の中でもエキゾチック動物という言葉がどういった意味を指すのかわからない先生方が多数いると

思われる。欧米のエキゾチック動物と題した書籍には、ウサギやフェレットなどの小型哺乳類や鳥類、爬虫類はもちろん、両生類や魚類さらには無脊椎動物をエキゾチック動物として扱った書籍まで存在している。日本や欧米のエキゾチック動物を診療する獣医師の間ではペットとして飼育されている犬猫以外の動物をエキゾチック動物と呼んでいる。この定義では、産業動物や野生動物、動物園動物は含まれていないが、ここではこの定義に基づきエキゾチック動物という言葉を使用する。

エキゾチック動物に関する獣医師側の関心は年々増加し、セミナーや書籍なども多数みられるようになってきた。また、エキゾチックペット研究会などが主催するセミナーには毎回多数の獣医師が参加し、症例発表会なども演題数の調整に苦心している状況である。また、一般の人がイメージする獣医師の姿は、色々な動物を治療することができる「動物のお医者さん」というものが最も多いものではないだろうか。私自身、こうしたイメージを持って獣医師となり、獣医師となってまだ10年程度しか経っていない正真正銘の若輩者である。また、当初から、エキゾチック動物のみを診療対象としようと思っていたわけではなかった。しかし、筆者は現在、大学病院でエキゾチック動物診療責任者として勤務するとともに、エキゾチック動物のみを診療対象とする病院を都内に開業している。この間、多くの先輩獣医師や後輩獣医師、飼い主から助言や協力、指導を受け、獣医師としてこの分野に果たすべき役割があるのかどうか、果たすべき役割があるのならどういった獣医師、団体がどのように果たすべきなのかについて、さらにこの分野の将来性

について色々と考え議論してきた。本稿では、こうした経験に基づき、現時点でのエキゾチック動物の獣医療に関する私の考えを述べたいと思う。

2 エキゾチック動物の飼育と診療

エキゾチック動物は愛玩目的のみではなく飼育を楽しむ、繁殖を楽しむ、色々な品種や色の違った個体を集めて楽しむ、生息環境を再現しインテリアとして楽しむなど様々な目的で飼育されている。こうしたエキゾチック動物を飼育することに対する意見は様々であり、獣医師が診療すべきかどうかについても様々な意見がある。実際、動物病院に来院するエキゾチック動物の多くはウサギやフェレット、セキセイインコなどのように古くからペットや使役動物として飼育されている動物がほとんどである。しかし、現実的には貴重な野生動物を採取しペットとして輸入している現状があり、時折そういった種類の動物が来院することもある。一方、げっ歯類のチンチラやアホロートル(ウーパールーパー)などのように野性下では絶滅が懸念されているものの人の手によって完全に累代繁殖され、新しい飼育技術や獣医療が確立されてきている動物もいる。現在、エキゾチック動物の診療に携わる獣医師の多くが幼少時から様々な生き物を飼育するとともに、野性下の動物を観察し、野生動物を飼うことに対して自問自答し様々な意見を持っている。私の知る限り、こうした獣医師のほとんどは最終的に野生動物を飼育することに否定的な意見を持つようになるが、十分な議論がなされぬまま、エキゾチック動物という全般でくくってしまうことは意味がないばかりか、様々な軋轢を生む原因にもなりかねないと思っている。

実際、我が国は多くの動物を輸入し、流通経路に乗せ、疾患に罹患した動物が存在し、飼い主はその治療を求め動物病院を受診している。その際、獣医師が一方的に「飼ってはいけない」、「よくわからない」と一言で済ませるのではなく飼い主の話聞き、相談に乗り、飼養管理について説明したり、より経験のある獣医師を紹介したりすることができるようになることが重要ではない

[†] 連絡責任者：三輪恭嗣 (みわエキゾチック動物病院)

〒114-0015 北区中里2-11-3 SKハウス102

☎03-6421-3722 FAX 03-6421-3723

E-mail : miwayasutsugu@hotmail.com

かと考えている。

私が子供のころは、爬虫類が病気になっても動物病院に連れていくのではなく、ペットショップや他の飼育者に相談するのが一般的であった。しかし、ようやく近年、動物を飼育することの意味と責任を自問自答しながら、真剣にそのことを考えた一部の先輩獣医師が、飼育者や動物と向き合い、少ない情報の中、努力した結果、動物が病気になった場合には獣医師に診せるということが一般的になってきている。全ての小動物臨床医がエキゾチック動物を診療する必要はないが、我が国において獣医師が動物に対して治療できる唯一の権利を持っていることや、現在、欧米での同分野における獣医師が果たしている役割を考慮すると、日本の獣医師界としてもこのことに対して今後真剣に対応していかなければならないものと考えている。

3 獣医師の役割

獣医師として社会に果たす役割を考えた場合、公衆衛生や家畜衛生、産業動物、動物検疫、野生動物の保護などが社会全体に対する役割を果たしているのに対し、小動物臨床などは主に動物を飼育している人達を対象にし、さらにエキゾチック動物はより限られた人達を対象にしている。こうした意味では、小動物臨床医は社会的役割の中ほんの一部を担っているだけかもしれない。しかし、実際の現場では愛玩動物を家族同様に考える人が増えてきている。そうした飼い主にとっては家族として迎え入れた動物の種類は関係なく、病気になった際には適切な獣医療が施されることを期待し動物病院を受診する。実際に、近年では、エキゾチック動物のみを診療対象とする動物病院の数や動物病院に来院するエキゾチック動物の数も増加してきており、社会的なニーズがあることを証明している。こうしたニーズに答えることも動物に対して投薬や治療行為を行える権利を持つ獣医師の果たすべき役割の一つではないだろうか。その他、ズーノーシスや野生動物の保護など社会全般にかかわる事柄でも動物の専門家として獣医師に意見を求められる機会が増加してきている。さらには実験動物の麻酔や取り扱いなどへの対応、様々な能力を持つ各種動物に関する調査研究などにより、獣医師だけではなく他の分野へ動物の専門家である獣医師として貢献できる大きな可能性を秘めており、この分野を確立していくことで社会的なニーズや獣医師の果たすべき役割も今後より大きくなっていくものと思われる。

4 野生動物、動物園動物とエキゾチック動物

エキゾチック動物には野生動物や動物園などで飼育されている種も一部含まれている。これらの分類に明確な定義はないが、前述したエキゾチック動物の定義にあてはめるならば一番大きな違いは個人的な飼い主がいるか

どうかである。小動物臨床では当たり前であるが、飼い主がいる場合には最終的な治療方針を決めるのは飼い主である。このため、治療をすれば完治する可能性が高いとわかっていても治療を断念せざるを得ない状況や、逆に予後不良と思っているにもかかわらず治療をしなければならない状況にしばしば遭遇する。私が診療をしている大学病院や自身の病院は紹介症例が多い。このため、ほとんどの場合、できる限りの治療を望む飼い主が多く、これまで予後不良と思っていた症例でも完治やQOLの向上が得られたということを幾度も経験している。

ウサギやフェレットなどの小型哺乳類やある種の鳥類、爬虫類など比較的飼育頭数の多い動物ではこうした、個々の症例における臨床医の経験が野生動物や動物園動物にフィードバックできる部分があるものと考えている。逆に、飼育頭数の少ない種や飼養管理が十分にわかっていない動物に関する情報は動物園や野生動物からのフィードバックをエキゾチック動物の獣医療にするなど、いくつかの相違点はあるものの今後はこうした相互の情報交換を行うことで、より良い関係を築き上げることが重要であると考えている。

さらに、貴重な野生動物を飼育下におくことを考慮すると、個々の獣医師の経験を個人的なものや一施設の情報として埋もれさせることなく、国内外を問わず情報交換し、記録、発信していくことが獣医療の発展に貢献するだけではなく、多くの動物を海外から輸入し続けている我が国の獣医師としての責任でもあると思う。その責任を果たすことで、最大の動物輸入国の一つである我が国が単に動物を消費しているだけではなく、獣医師の役割や動物に対する責任を真剣に果たそうとしているという日本の獣医師の姿勢を世界に対してアピールできるものと考えている。

5 獣医学系大学としての役割

以上のように、新しい可能性を秘め、社会的なニーズとしてエキゾチック動物に対する高度医療や専門性を持った獣医療が望まれ、動物の専門家として様々な動物に対する意見が求められている現在、その責任を担う立場である獣医師はこれに答える義務があると考えられる。これは同時に、獣医師を育てる機関が大学であるならば獣医学系大学もその責任の一端を担う義務があるのではないかと考えている。

実際、エキゾチック動物の講演やセミナーを行った場合、多数の獣医師や学生が参加していることから獣医師の中でもこの分野に興味を持っている者がいることは間違いない。また、米国などをみてもわかるように、エキゾチック動物の飼育経験がなくとも体系だった教育により基礎的なことを学び、卒業教育の場が設けられていれば、より多くの学生や獣医師がこの分野の発展に貢献し、社会的役割を果たすであろうことは容易に想像できる。

臨床的な側面以外にもエキゾチック動物の獣医療を我が国の獣医学の新しい分野の一つとして確立していくことは、解剖や生理、薬理学など基礎的な獣医学に新たなテーマを提供し、人医学との競争ではなく、動物の専門家としての責任を果たした上で、獣医師からこれまで以上の情報提供を行うことで様々な分野の発展に貢献でき、獣医師の社会的な地位向上にも貢献できるのではないかと考えている。

現在、ほとんどの大学教官が犬猫中心であるため、犬猫の専門分化がどうしても優先される。しかし、以上のような理由から犬猫の次ではなく、同時にエキゾチック動物にも目を向けて対応していくことで、動物の専門家である獣医師という職域の新たな可能性を広げることができるのではないだろうか。そのためには、やはり、獣医学系大学の果たす役割は小さくなく、個人的にも新しい分野の開拓を行う中心的な役割を大学が果たして欲しいと願っている。

6 エキゾチック動物獣医療の将来性

これまで、獣医師となってまだ10年程度しか経験のない若輩者の私見を述べてきた。もちろん、私が獣医師になる以前から犬猫以外の動物を診療や研究対象としてきた獣医師は数多くいる。しかし、私の知る限り、数年前まではエキゾチック動物を診療している獣医師の多くは幼少時から動物に興味を持ち、数多くの動物を飼育してきた経験と大学や卒業後に学んだ犬猫の獣医学をもとに独学しながら診療しているような状況であった。言うまでもなく、我々、獣医師は命を扱う職業である。これまでのように個人の努力や経験に頼るのではなく、系統だった教育を行い、情報や経験を共有することで、多く

の命を犠牲にすることなく、より良い獣医療を動物や飼い主に提供できるようになるのではないだろうか。また、そうすることで、今後、臨床医の住み分けや新しいテーマの発見、他分野との共同研究などの可能性も出てくるものと考えている。もちろん、全ての獣医師がこの分野に目を向けなければならないというのではなく、多くの可能性が詰まっているこの分野を獣医学の一分野として一部の獣医師や大学が確立していくことの意義を考えていただき、見守っていただければと思っている。

7 おわりに

これまで、大学に在籍している間に数多くの先輩獣医師と獣医学の将来について話し合った。それぞれの先生がそれぞれの信念と夢を持ち、獣医師の社会的地位の向上やよりよい未来のために頑張っている話を聞いた。私自身当初からエキゾチック動物のみを診療対象にしようと思っていたわけではなく、診療対象をエキゾチック動物のみに絞った際、何人かの先生からは反対され自分自身迷いに迷ったのも事実である。しかし、今現在、エキゾチック動物を診療対象にしていることに一片の後悔もなく、ここ数年間を振り返るだけでも数多くの先輩獣医師の努力と助言や指導、協力があってようやくこのような場が設けられ、多少なりとも獣医界がエキゾチック動物の獣医療という分野に目を向けていただけたものと感慨深い。今後は、大学内外問わず、国内外問わず、獣医師であるかどうかとも問わず、個人の力としては微力ながらこの分野の発展と確立を目標に、様々な人とともに協力して一步一步前に進んでいくことが、獣医師、飼い主、動物や社会全体にとって良い影響をもたらすものであると思っている。